

博士論文（要約）

南方熊楠の学問形成

松居竜五

## 序章 —— 南方熊楠研究の流れと本稿の位置づけ

### 1 南方熊楠研究の変遷

筆者が南方熊楠に関する書籍を初めて出版したのは、今から二十五年前の一九九一年七月のことである。『南方熊楠 一切智の夢』（朝日選書、以下『一切智の夢』と表記）と題するこの本は、一九八九年度に東京大学大学院総合文化研究科比較文学比較文化専修課程に提出した同題の修士論文を増補し、書き直したものであった。

この『一切智の夢』は、筆者が南方熊楠という人物に関して得た概観を、特に前半生を中心に評伝的にまとめたものである。この本はその後の筆者の個人および共同研究による南方熊楠研究の出発点となっており、本稿もそうした研究上の流れの上に位置している。つまり、『一切智の夢』を前提として、これまでなしてきた仕事をまとめたものが本稿である。そこで、本論に入る前に、『一切智の夢』にいたる南方熊楠の研究史、それ以降の一般のおよび筆者個人による研究の内容、そうした中での本稿の位置づけに関して記しておきたいと思う。

まず、筆者が『一切智の夢』を上梓した一九九一年という年は、南方熊楠の没後五十周年に当たり、それを契機として一種の「南方ブーム」が起きて、彼の思想や学問的業績に、本格的な関心が持たれ始めていた頃であった。当時、関連の展覧会がおこなわれたり、雑誌などで特集が組まれたり、テレビでその生涯が紹介されたりといったことにより、南方熊楠という人物の学問的関心の幅広さや、今日に通じる国際的な視野が、ようやく評価されつつあった。

その背景としては、一九七〇年代前半に平凡社から『南方熊楠全集』全十二巻が刊行されて、熊楠の文章が平易に読めるようになっていたことが大きかっただろう。それまで断片的にしか紹介されていなかった熊楠の重要な著作、とりわけ私信の類が、平凡社版ではかなりの程度まとまって収録されており、その後の研究の基盤としての役割を果たすことになった。

この平凡社版の全集を受けて、一九七八年に鶴見和子が講談社の「日本民俗学大系」の一冊として『南方熊楠 地球志向の比較学』を刊行したことは、実証的な研究の開始という意味で画期的なことであった。それまでは風変わりな学者として認識されていた南方熊楠を、時代に先駆けた思想家としてとらえ直した鶴見の論が、その後の研究に与えた影響は大きい。特に、青年期の熊楠が、十九歳から三十三歳のアメリカ、英国での学問的研鑽を通じて当時の西洋思想と近代科学の方法論を吸収し、それを踏まえて独自の世界観を作り出そうとしていたという鶴見の指摘は、それまでの熊楠に対する見方を転換するに十分な説得力を備えていた。

さらに研究資料の充実という意味では、平凡社版全集の編集者として活躍した長谷川興蔵が、一九八七～一九八九年に南方熊楠の前半生の日記を翻刻し、出版したことが挙げられる。長谷川はまた、平凡社全集では収録しきれなかった熊楠の書簡類や、関連の論文類を一九九〇年頃までに精力的に出版しており、資料面での熊楠の研究の土台を作り上げることに尽力した。一九九一年の「南方ブーム」が、それまでのような興味本位の取り上げ方に終わらず、熊楠の思想の理解を促進する方向を示したのは、こうした地道な努力が実を結んだからに他ならない。

しかし、南方熊楠の没年である一九四一年以降の長い間、研究がなかなか進まなかったのはなぜなのか。これに関して、まず考慮すべきなのは、四十代以降の南方熊楠が、大学などの研究機関と距離を置き、東京や近畿圏のような国内の学問的拠点と離れた場所の後半生を過ごしたことだろう。自宅のある和歌山県田辺からほとんど動くことなく、必要な研究資料を邸内の

庭の土蔵に詰め込んで人文学の著述と生物学の調査に打ち込んでいた熊楠は、研究者としてはもちろん、知識人としても同時代の日本にあっては特異な活動形態を取っていた。実は、熊楠は田辺にあっては英国の民俗学雑誌に年に何本もの論文を投稿したり、関連の研究者との文通をおこなったり、植物学の標本をやりとりしたりと、当時としては珍しいほど海外との学問交流をおこなっていたのだが、そうした活動の具体的な内容については、生前にはあまり知られることはなかった。

その結果、国内の雑誌に発表された熊楠の著作を愛読していた一部の熱心な信奉者や、粘菌（変形菌）の採集と研究に協力した数人の「弟子」はいたものの、熊楠の学問を総体として継承する人間は存在しなかった。これは、生前に多くの弟子に囲まれて、没後は一学派の開祖としての扱いを受けるようになった柳田国男や折口信夫の場合とは、相当に異なった状況であったと言えるだろう。そして、真珠湾攻撃による日米開戦の直後に没した熊楠の遺品類は、戦争中の疎開を経て、妻の南方松枝や地元の協力者の手によって自宅で保管されることとなった。さらに一九五五年の松枝の死後は、その資料は娘の南方文枝とその夫で日本大学水産学部教授の岡本清造の手にゆだねられた。

この間、一九五〇年に柳田国男や澁澤敬三の肝いりによって創立されたミナカタ・ソサエティの編集によって、最初の『南方熊楠全集』全十二巻（乾元社、一九五〇～五一）が刊行されたり、生前に「御進講」を受けた昭和天皇が熊楠を懐かしんで御製の短歌を詠むなどのできごとがあった。そうした気運を受けて、一九六五年に岡本清造の尽力によって田辺の隣の白浜町に南方熊楠記念館が設立されたことは、一般の関心を引くという点で一定の成果があった。しかし、邸内に残された資料はあまりに膨大で多岐に亘るものであったため、その一部を記念館に移管した際にも、本格的な調査の段階に進むまでには至らなかった。

こうした状況を背景として、一九六〇年代までに書かれた熊楠に関する記述には、年中裸で暮らしたり、日に二升の酒を飲んだりという、虚実ないまぜになったその奇行に焦点を当て、面白半分に描き出しただけのものが多い。たとえば、熊楠の生前の一九二六年に書かれた中山太郎の紹介文、「私の知ってゐる南方熊楠氏」は、後に増補して『学界偉人南方熊楠』として一九四三年に刊行されたが、熊楠本人をして「小生の名を題した小説稗史と見るものに候」<sup>1</sup>と言わしめるようなものであった。乾元社版の全集の宣伝を兼ねて執筆された佐藤春夫の伝記『近代神仙譚』（乾元社、一九五二年）も、題名からわかる通り、熊楠を超俗的な偉人として描き出している。このような傾向は、形を変えて神坂次郎『縛られた巨人』（新潮社、一九八七年）、津本陽『巨人伝』（文藝春秋社、一九八九年）のように後年まで続くことになる。<sup>2</sup>

そうした中で、比較的早い段階で熊楠を学者として評価すべきだと主張した知識人としては、柳田国男、桑原武夫、益田勝実が挙げられる。しかし、熊楠の思想形成にとって重要な役割を果たした海外での学問的研鑽について「人間の魂が生長してゆく一番大切な壮年期を、いはば比較的無意味な仕事に暮らされてゐた」<sup>3</sup>と断ずる柳田は、熊楠の学問の全体像をとらえていたとは言いがたい。また桑原も、熊楠は単なる雑学者ではなかったと擁護しながらも、「しかし、彼のいう学識の整理には理論が必要ではなからうか」と指摘し、その点が熊楠を「一流の近代的科学者と呼ぶことを妨げる」としている。<sup>4</sup>

熊楠には理論がないという観点は益田にも受け継がれており、主著の「十二支考」を論じた文章の中では「南方のこの博識は浪費された知識ともいえないだろうか」<sup>5</sup>と論じている。つま

り、通俗的な理解としては超人的な活躍をした人物としての伝説的な熊楠像、学問的な理解としては博学ではあるが理論的な基盤を持たないディレッタントとしての熊楠像が、この頃には形作られていたわけである。その一方で、平凡社版全集の刊行に際して益田が、熊楠の思想を理解するためには「わたしたちの南方観に脱皮があり、成長もあって、はじめて読み取れるものも広くなり、深くなる」と、「こちら側の問題」にも言及したことは重要であろう。

こうした研究状況を一変させたのが、一九七八年の鶴見和子による『南方熊楠 地球志向の比較学』の登場であった。鶴見はその時刊行されたばかりの平凡社版の全集を駆使して、それまでは本流から外れた異質なものと考えられてきた熊楠の学問が、実は当時の西洋思想の流れをきちんと踏まえたものであることを説いた。その上で鶴見は、熊楠が非西洋人として、西洋の学界に対してどのような点に不満を感じ、どのようにしてそれを乗り越えようとしていたのか、一つ一つの問題点を実証的に分析していったのであった。思想家の研究方法としてはきわめてまっとうとも言えるオーソドックスな文献による理解を貫くことによって、結果的に鶴見はそれまでの熊楠像を覆すような新しい観点を打ち出した。

この『地球志向の比較学』における鶴見の論点をまとめると、まず熊楠が「問答形式の学問」によってみずからの知的活動をおこなっていたという指摘がある。熊楠は一八九三年に『ネイチャー』(Nature)、一八九九年に『ノート・アンド・クエリーズ』(Notes and Queries)という二つのロンドン発行の学術誌に投稿を開始し、それは帰国後も長く続いた。生涯に発表した英文論考の総数は、短いものも含めれば四百本近くに達する。今日の目から見れば民俗学、比較文化、科学史、植物学などに分類されるそれらの論文は、基本的には質問と回答を繰り返すような誌上でのやりとりを踏まえた上で執筆されていた。それゆえに、そこで共有されていた問題意識を前提としなければ、熊楠の思想のあり方を正確に把握することはできないという重要な事実を、鶴見は「問答形式の学問の展開」という言葉で、初めて明確に指摘した。

鶴見はまた、熊楠が友人の土宜法龍に宛てた書簡の中で、真言密教の思想を援用しながら「予の曼陀羅」と呼ぶ世界観について語っていることに注目した。鶴見は熊楠が、近代科学の問題点を克服した方法論を模索しているとして、その学問的モデルを「南方マンダラ」と名づけたのであった。生前には発表されることのなかった熊楠のこの独自の学問構想がどの程度成功しているかについては議論の余地があるが、少なくとも桑原や益田が嘆いた「熊楠には理論がない」という批判に対して、鶴見のこの指摘が強力な反論となったことは確かである。

さらに鶴見は、一九〇九年に神社林の保護を目的として熊楠が開始した「神社忌祀反対運動」を、「エコロジーの立場に立つ公害反対」として評価した。熊楠はこの運動の中で、生物同士の関連を研究する学問としての「エコロジー」に言及しながら、そうした連関する生態系を全体として保存することの重要性を訴えた。鶴見は熊楠のそのような視点の持つ先駆的な意義を積極的に取り上げつつ、その思想の中核を「地球は一つ、されど己が棲むところにおいてそれを捉えよ」<sup>7</sup>と言い表している。

鶴見のこうした議論には、国際的な社会学者としての彼女が戦前から長い時間をかけて確立してきた視点が、熊楠という対象を得て実を結んだ感がある。その一方で、基礎資料の分析という意味では、『地球志向の比較学』が出版された一九七八年という時期には、まだまだ限界があったことも否定できない。鶴見がこの時対象とすることのできた資料は、ほぼ平凡社版全集に収録されたテキストに限られていた。しかし、熊楠の学問的思考の軌跡は、生前に雑誌に刊

行された論考よりもむしろ膨大な私信の中に記されているものが多く、それらはこの全集ではかなりの部分が抜け落ちた状況であった。鶴見は『地球志向の比較学』の執筆過程で一度田辺市の旧邸を訪れてはいるが、ずっと後年の一九九五年までは、庭の一角にある土蔵に残された資料を直接手にとつて見ることはできなかった。

平凡社版の全集の編集過程では、南方邸の資料に関しても、ある程度の調査はされていたようである。またそれ以前にも、後述するように岡本清造が熊楠の日記の翻刻をおこなうなど、一次資料の掘り起こし作業が試みられている。しかし、二階建ての土蔵を埋め尽くさんばかりに残されていた熊楠の遺品や資料はあまりに膨大であり、研究的には「宝の山」とも言うべき資料群は、木箱や段ボール箱に収められたままで、長年、その多くが人目に触れることさえなかつたようである<sup>8)</sup>。

修士論文の執筆のために、一九八九年に初めて和歌山県田辺市の南方熊楠邸を訪れた私は、中瀬喜陽氏の紹介で熊楠の長女の文枝さんにお会いし、これらの資料を見せていただく機会を得た。そして、修士論文提出後の一九九〇年夏には、最初の邸内資料調査をおこない、中瀬氏と共同でその結果について発表することができた。特に、熊楠がロンドンにいた時期に、英国などの学者から受け取った書簡や、関連の重要文書を発掘できたことは、たいへん有意義であった。現在の目から見れば膨大な邸内資料のうちのごく一部ではあったものの、この時発見された新資料は、翌年に刊行された『一切智の夢』の中に活用されている。

## 2 『南方熊楠 一切智の夢』における分析

本論の内容に入る前に、この序章では現在に至る南方熊楠研究の流れと、私自身のこれまでの試みを押さえた上で、今回の研究の意図するところと、そのための方法論に関する位置づけを明確にしておきたいと考えている。そこで、過去の自著について云々することは気が引けるところもあるのだが、ここからは一九九一年に上梓した『南方熊楠 一切智の夢』の内容について、論点をまとめた上で紹介することをお許しいただきたい。

『一切智の夢』において私が試みたのは、主に熊楠の前半生における学問形成の過程について明らかにすることであった。熊楠の生涯は、一般的に次のような時期に分けて考えられることが多い。

- 和歌山時代 一八六七～一八八三年（〇～十六歳）
- 東京時代 一八八三～一八八六年（十六～十九歳）
- アメリカ時代 一八八六～一八九二年（十九～二十五歳）
- ロンドン時代 一八九二～一九〇〇年（二十五～三十三歳）
- 和歌山・那智時代 一九〇〇～一九〇四年（三十三～三十七歳）
- 田辺時代 一九〇四～一九四一年（三十七～七十四歳）

このうち、特に二十五歳から三十三歳までのロンドン滞在期は、熊楠がどのような経験の中でみずからの学問を作り上げていったのかを知るために、もつとも重要な時期であると私は考えていた。大英博物館にひんばんに出入りするようになり、英国知識人との間で人脈を作り、『ネイチャー』や『ノーツ・アンド・クエリーズ』といった学術誌への投稿を始めたこの時期

は、熊楠の活動の中でも、内外の資料による多角的な分析が可能な部分でもある。そこで『一切智の夢』では、この時期に熊楠が執筆した英文論文に焦点を当てることと、大英博物館を中心としたこの頃の熊楠の関連学者との交流を跡づけることを主な目的とした。

その際、鶴見が「問答形式の学問の展開」と呼んだ熊楠の著作の特徴は、調査・研究を進める上で大きな参考になった。論文であれ私信であれ、熊楠の書いたものの多くは、同じ問題を共有する国内外の知識人とのやりとりの中で生まれてきたものである。だとすれば、その文脈を再現することによってのみ、熊楠がその時々によつてきたような考えを持っていたのか、そしてその思想が全体としてどのような方向に向かっていたのかを知ることができるといふことになる。

こうした見取り図に沿って、『一切智の夢』の中でまず詳細に分析したのが、熊楠の『ネイチャー』一八九三年十月五日号に掲載された最初の投稿論文、『東洋の星座』である。ロンドンからの帰国後、熊楠は英国の学界での自分の活躍についてさまざまに語っており、二十七歳の時の処女作である「東洋の星座」に関しては、「たちまち『ネーチュール』に掲載されて、『タイムズ』以下諸新紙に批評出で大いに名を挙げ」<sup>1)</sup>とその成功を誇っている。しかしこの論文は、後に尾ひれがついて「懸賞論文で一等を得た」と喧伝されているようなものではなく、『ネイチャー』誌の読者投稿欄に出た一般読者からの世界の星座に関する質問に答えた論考であった。当時の『ネイチャー』がアマチュアにも開かれた雑誌であったことや、また東アジアの科学についての知識が、当時の西洋人にとって新鮮なものであったことが、熊楠の論文が受け入れられた大きな要因であった。

その一方で、実際に「東洋の星座」を分析してみると、英語の生硬さは措くとしても、熊楠の学問的な手続きが、この頃はまだまだ未熟であったこともわかってきた。熊楠はこの論文ではインドと中国の古代の星座体系の比較を試みているのだが、その中で両文明間の交流がなかったことを前提としている。しかし、この当時のヨーロッパの学界ではすでにその可能性については議論されており、熊楠はそうした成果を取り入れていない。また、和漢の事典類のみを典拠としている文献面の確認の不充分さも指摘できる。こうした「東洋の星座」の分析からは、熊楠の学問がけつして最初からきちんとできあがっていたものではなく、試行錯誤の中で作り上げられたものであることを感じさせられた。

その後、熊楠は「動物の保護色に関する中国人の先駆的観察」(一八九三年)、「拇印考」(一八九四年)、「マンドレイク」(一八九五年)、「さまざまえるユダヤ人」(一八九五年)などの論考を『ネイチャー』に次々に発表していく。これらの投稿に関して熊楠自身は、「東洋にも【中略】欧州に恥じざる科学が【中略】ありたることを西人に知らしむること」<sup>1)</sup>を目的としたものであったと述べている。

このような『ネイチャー』における熊楠の活動は、英国内外で東洋学の研究者の注目を引くこととなった。ロシアの昆虫学者のオステン・サッケンは、蜂やアブに関するフオークロアについて、熊楠との文通の結果を自著に反映させた。ロンドン大学事務総長のF・V・ディキンズは一八九六年に熊楠に手紙を送り、以後何度も面会して日本文学に関する共同研究を進めることになる。また、オランダで発行されていた『通報』誌や『国際民族誌報』は、「拇印考」や「マンドレイク」を転載して、熊楠の論を紹介している。その一方で、オランダの東洋学者のグスタフ・シュレーゲルは、一八九七年に熊楠と「落斯馬」という名の海の生物について激しい論争をおこなった。この時、相手を論駁することに熱中した熊楠は、老境に差し掛かっ

たシュレーゲルに容赦なく感情的な書簡を送り続け、ついに全面的に誤りを認めた手紙を書かせることに成功した。

これらの英国内外の学者と熊楠とのやりとりに関しては、『一切智の夢』刊行の前年におこなった邸内資料調査で発見した海外來簡が重要な材料となった。それまでは熊楠自身の語りによってしか知ることのできなかった海外での「問答形式の学問」の実態を、相手方の資料との対照によって再現していくことが、これらの資料によって可能になったからである。また、それぞれのケースにおいて、雑誌上での「表の」やりとりと、私信による「裏の」やりとりが同時進行しているという重層的な流れについてもわかってきたことは収穫であった。

ロンドン時代の熊楠の研究拠点であった大英博物館での活動も、『一切智の夢』の中で重点的に取り上げたものの一つである。二十六歳で「東洋の星座」を書き上げたばかりの熊楠が、美術部門のトップであったウオラストン・フランクスに見出され、フランクスの助手であったチャールズ・リードや、東洋書籍部のロバート・ダグラスとの交友関係の中で、博物館の図書を自由に用いて研究ができたことに関しても、前年の資料調査の成果が役立った。また、熊楠が大英博物館の円形図書室などで一八九五年から一九〇〇年の間に作成した五十二冊の筆写ノート「ロンドン抜書」については、旅行書が多く見られることなどの簡単な報告を載せることができた。

こうした新資料の中でも、もっとも大きな示唆を与えてくれたのは、一八九八年十二月に熊楠が大英博物館を暴力行為によって追放された際の理事会宛の釈明の手紙の草稿、通称「陳状書」である。この文書からは、熊楠がハーバート・スペンサーの社会学研究を大英博物館での筆写の際のモデルとしていたことや、彼が英国内での人種差別的な雰囲気を持っていたことなど、その学問と日常生活に関する生々しい証言を読み取ることができた。フランクスに見出され、リードやダグラスの庇護を受けた熊楠の大英博物館の中での位置づけについても、この資料を当時の日記や書簡と組み合わせることで、かなり明かになった。この時、大英博物館に関して調査した内容は、その後英国留学中に共著で出版した『達人たちの大英博物館』<sup>1,2</sup>でも生かされている。

このように、『一切智の夢』においては、前年の南方邸調査の成果を生かして、ロンドン時代の熊楠に関して、一定程度、実証的な議論ができたと考えている。また、全体として前半生を中心とした通年的な評伝としてまとめたことにより、熊楠を従来のような伝説的な「巨人」ではなく、等身大の人物としてとらえる鶴見の研究を引き継ぐ観点を打ち出せたと思う。明治・大正・昭和前期という転換の時代の中で、東アジアの伝統的知識と西洋の近代思想とともに踏まえた熊楠という日本人思想家の体験をこうした視点からとらえることは、同時代の文化的な流れを考える上での一つの指標にもなり得るものだと考えている。

その一方で、熊楠の思想形成の解明という所期の目的に関しては、この本ではまだまだ達成できなかった面が多いことも事実である。特に、ロンドンに至るまでの十代から二十代前半にかけての熊楠が、東京およびアメリカで吸収した学問の内容については、資料に基づいた精緻な分析ができなかった。また、「ロンドン抜書」に関しては、大まかな傾向に関してはわかったものの、筆写されている書籍の中身にまで踏み込んだわけではなかった。さらに、鶴見和子以降「南方マンガラ」と呼ばれて脚光を浴びることになった熊楠の那智時代の思想や、熊楠の主著と目される「十二支考」に関しては、ほとんど触れていない。

このような点に関しては、当時の私の力量不足による面が大きいものの、一部を除いて南方

邸の資料がほとんど未調査であったことや、海外のものも含めた関連資料が調べられていなかったことも大きな原因であった。そこでこうした経緯を踏まえて、『一切智の夢』以降の研究では、関連研究者との共同作業とも連動しながら、個々の資料の発掘と全体像の再構成を繰り返すことで、進めることとなった。以下、一九九〇年代から現在にかけての南方熊楠研究の動向と、私の研究内容に関して紹介してから、本研究の位置づけに関して記すこととしたい。

### 3 南方熊楠邸資料調査と研究の進展

『一切智の夢』を刊行した年に東京大学教養学部留学生担当講師となった私は、その翌年の一九九二年に、南方文枝氏から邸内資料の調査を依頼された。そして前述の中瀬氏などの地元有志が中心となって結成された南方熊楠顕彰会の主導で、田辺市としてこの調査を支援していただけることとなった。そこで関連の研究者に声をかけて調査チームを作り、南方熊楠資料研究会が発足した。平凡社版全集の際に長谷川興蔵とともに編集作業に従事された東京都立大学教授（当時）の飯倉照平氏が会長となり、国文学、英文学、中国文学、西洋古典、西洋史、植物学などの専門家が、資料の整理とデータベース化を担当した<sup>13</sup>。

以後、春と夏と一週間ずつの合宿調査が定例化し、一九九六年からは科学研究費補助金も受託して、研究チームは次第に規模が大きくなっていった。一九九九年から二〇〇六年にかけては、毎年度末に『熊楠研究』を刊行して、関連の論文とともにこの資料調査の成果を逐次報告するようにもなった。この雑誌には数々の重要な論考だけでなく、新たに発掘された資料も掲載されており、本稿も非常に大きな恩恵を受けている。

邸内資料調査の最終的な成果は『南方熊楠邸蔵書目録』（二〇〇四年）および『南方熊楠邸資料目録』（二〇〇五年）としてまとめられた。また、この間、田辺市の南方邸だけでなく、白浜町の南方熊楠記念館の調査もおこない、一九九七年に『南方熊楠記念館資料目録』を刊行している。本稿では、これらの目録の資料番号を「」のかたちで示し、一次資料の同定のために用いた。

こうした旧邸資料の保存に関しては、二〇〇二年に南方文枝さんが亡くなった後に、田辺市が隣地を購入し、研究施設の建設が進められた。その結果、二〇〇六年に開館した南方熊楠顕彰館にすべての邸内資料が移管され、一般に公開する体制が整えられた。この顕彰館では、学術部を中心として関連の刊行物の作成や、展覧、講演会の組織などもおこなわれている。

この間、資料の公刊という面でも、さまざまな進展があった。特に本研究との関連では、共同作業によって熊楠のすべての英文論文が完訳されたことが大きいだろう。まず『ネイチャー』掲載分の五十一篇と関連論文が、飯倉照平監修、松居竜五・田村義也・中西須美訳『南方熊楠英文論考（ネイチャー）誌篇』（集英社、二〇〇五年）として刊行された。そして先頃、残りの三百二十四篇他が、飯倉照平監修、松居竜五・田村義也・志村真幸・中西須美・南條竹則・前島志保訳『南方熊楠英文論考（ノーツ・アンド・クエリーズ）誌篇』（集英社、二〇一四年）として出版された。これらの翻訳には、詳細な解説と、発表の経緯（特に誌上でのやりとり）、熊楠の日本語著作との関連などが付されており、英文論文を中心とする熊楠の学問的展開の全体像が把握できるようになっている。

また、南方熊楠に関する未公刊の資料の発掘と刊行も相次いだ。熊楠がアメリカ時代に留学生仲間の廻し読みのために執筆した「新聞」である「珍事評論」と、ロンドン時代に公使館宛

てに送りつけた戯文「ロンドン私記」が発見され、長谷川興蔵・武内善信校訂『南方熊楠 珍事評論』（一九九五年、平凡社）として出版された。これにより、二十代前半から三十歳前後までの熊楠の、過剰とも言える自意識に満ちた自己語りの世界が明かにされた。

二〇〇四年には、鶴見和子の「南方マンダラ」評価以来、熊楠の思想的な根幹部分として考えられてきた土宜法龍宛の書簡が、新たに四十三通発見されるというできごとがあった。これらは、詳細な注釈とともに奥山直司・雲藤等・神田英昭編『高山寺蔵南方熊楠書翰 土宜法龍宛 1893-1922』（藤原書店、二〇一〇年）として刊行され、既存の飯倉照平・長谷川興蔵編『南方熊楠 土宜法竜往復書簡』（八坂書房、一九九〇年）に収録された二十三通の熊楠の書簡と、三十一通の土宜の書簡と合わせて、両者のやりとりがかなりの程度わかるようになった。さらに、南方熊楠顕彰館および南方熊楠記念館から、植物学における弟子である小畔四郎、平沼大郎、樫山嘉一に宛てた熊楠の書簡が翻刻・刊行されている<sup>14</sup>。

熊楠の日記については、前述のように長谷川興蔵の手によって一八八五年〜一九一三年分、つまり十七歳から四十六歳の前半生の部分が八坂書房から『南方熊楠日記』一〜四巻として刊行されていた。これに加えて、南方邸資料調査の際に、女婿の岡本清造がその後の一九二二年、五十五歳時までの分の粗翻刻をおこなった原稿が残されていることがわかった。また、一九二三年以降の日記に関しては、東京、関西、田辺の三つの研究会で、分担して翻刻を作成することとなっており、現在作業が進行している。つまり既刊分以外の日記についても、一定程度の翻刻原稿が存在し、それ以外の未翻刻分についても、現在では南方熊楠顕彰館でスキャン画像が公開され、閲覧できるようになっている。

以上のようなかたちで、資料研究会の調査後に刊行・公開されてきたさまざまなテキストを概観し、さらに現在の研究状況についての情報を提供するために編纂されたのが、松居竜五・田村義也編『南方熊楠大事典』（勉誠出版、二〇一二年）である。この事典では、邸内資料調査に参加したメンバーを中心として、計三十八名が「思想と生活」「生涯」「人名録」「著作」「資料」「年譜」の六部構成で、研究に必要な事項を執筆した。記述のそれぞれに関しては、より詳細な典拠を付しており、南方熊楠の研究に関して、必要な情報を集大成した事典として活用できるものである。第六部には松居が作成した詳細な年譜が付されており、これにより経年順に熊楠の事蹟をたどることができるようになっていく。

こうした共同作業による基礎資料の整備とともに、個人によるさまざまな研究によっても、質量ともに多くの成果が挙げられてきている。特に、二〇〇〇年代以降は、『熊楠研究』や顕彰館の機関誌『熊楠ワークス』上を中心として多くの注目すべき研究論文が執筆され、研究書の刊行も相次いだ。これは、新たな資料がアクセス可能になることによって、より多角的な分析が可能になってきたことが大きな要因であると言えるだろう。ここでは、そうした最近の研究動向の中から、本研究に関係する主なもののみ取り上げて、簡単に紹介しておきたい。

まず、評伝としては飯倉照平による『南方熊楠 森羅万象を見つめた少年』（岩波ジュニア新書、一九九六年）、『南方熊楠 梟のごとく黙坐しおる』（ミネルヴァ書房、二〇〇六年）の二冊が挙げられる。特に後者は、資料調査の成果をバランスよく取り入れており、現時点でもっとも信頼のおける評伝と言えるだろう。飯倉はまた、『南方熊楠の説話学』（勉誠出版、二〇一三年）において、熊楠の説話研究に関する論考とともに、中国書と大蔵経の引用一覧を公開しており、これは基礎的なデータとして大いに役立つものである。

他に邸内資料を活用した書籍としては、原田健一『南方熊楠 進化論・政治・性』（平凡社、

二〇〇三年)、武内善信『闘う南方熊楠』(勉誠出版、二〇一二年)、雲藤等『南方熊楠 記憶の世界』(慧文社、二〇一三年)、唐澤太輔『南方熊楠 日本人の可能性の極限』(中公新書、二〇一五年)が挙げられる。原田の議論は、進化論の影響や性に対する考え方などに触れており、本稿と対象が重なる部分も少なからずある。武内は南方熊楠という名前の由来から、アメリカ時代の自由民権論への肩入れ、さらに神社祭祀反対運動の評価まで、生涯の全般にわたって論じており、参考にすべき点が多い。雲藤は、記憶の天才とされる熊楠の記憶力のメカニズムについて論じつつ、熊楠の語りと事実との懸隔についても考察している。唐澤の新書は、『南方熊楠大事典』などにおける近年のさまざまな研究成果を、手際よくまとめて紹介したものである。この他、主な研究書としては、中沢新一『森のバロック』(せりか書房、一九九二年。講談社学術文庫、二〇〇六年)、千田智子『森と建築の空間史』(東信堂、二〇〇二年)、橋爪博幸『南方熊楠と「事の学」』(鳥影社、二〇〇五年)、畔上直樹『村の鎮守』と戦前日本』(有志舎、二〇〇九年)、唐澤太輔『南方熊楠の見た夢 パサージュに立つ者』(勉誠出版、二〇一四年)などがある。また、『國文學』二〇〇五年八月号、『ユリイカ』二〇〇八年一月号、『季刊民族学』二〇一二年、『科学』二〇一三年八月号において関連の特集が組まれている。他に『南方熊楠とアジア』(勉誠出版、二〇一一年)、『別冊太陽 南方熊楠 森羅万象に挑んだ巨人』(平凡社、二〇一二年)にも多くの論考が掲載されている。

#### 4 本稿『南方熊楠の学問形成』の位置づけ

以上のように、邸内調査の進展と顕彰館の設立、研究の多角化によって、現在では、南方熊楠の理解に関して、一九九二年の『一切智の夢』執筆時とはかなり異なる環境が築かれてきた。

一方、筆者自身の研究としても、この間に国内だけでなく、ロンドンやアメリカ各地での調査を通じて、海外での熊楠に関する資料を収集することができた。特に、大英博物館での調査の結果として「ロンドン抜書」の内容目録をほぼ完成したことや、顕彰館や記念館において多くの一次資料を調査したことは、今回の研究の基礎として大いに役立った。

本稿の目的とするところは、こうして確立されてきた資料的基盤に依拠しつつ、熊楠の学問形成の軌跡を実証的にたどること、および熊楠の思想を同時代の知的な流れの中に位置づけることにある。その際、熊楠の学問をその形成段階においてとらえるために、一九〇〇年九月の熊楠のロンドンからの帰国以前の前半生を中心とすることとした。ただし、そのようにして形成された熊楠の学問が、その時々や、帰国以降の成果にどのようなつながっているかということが、明確にわかるように叙述しているつもりである。

したがって、本研究は『一切智の夢』で試みたような、南方熊楠に関する「評伝」とはやや異なる叙述方法を取っている。具体的には、熊楠の生涯における事蹟よりは、読書内容やメモから読み取れる思想・知識の受容と、ノートや論文としてのその発露、および関連する世界的な学問の流れとの照合、といった部分により重点を置いた。その際、「ロンドン抜書」を初めとする未刊行資料、蔵書への書き込みなど、これまであまり知られていなかった資料を多用して、細かい分析をおこなっている。また、熊楠が影響を受けた思想的な文脈や、彼が置かれていた同時代の知的背景を、できるかぎり明らかにするように努めている。

こうした目的のために、本稿の十章はそれぞれが独立した学術論文としても読めるスタイルに整えた。とは言え、熊楠という人物が、さまざまな時代状況に対応しながら自己の学問を形

作っていった過程を理解するためには、彼の内的な時間の流れをたどることも重要である。個人の学問や思想を知るためには、外側から物差しを当てはめるだけでなく、その人物の内側からの視線に寄り添いつつ、その内発的な展開を探ることが必要だからである。そのため、全十章における叙述は、なるべく時間軸に沿って配置し、熊楠の主観的な時間の流れを重視するようにした。

その際、熊楠の学問と結びついた伝記的事実に関しては、まず『一切智の夢』以降に筆者が発掘・分析したもの、次に近年の研究によってわかってきたが、その意味に関してまだ十分に分析が進んでいないものの紹介を優先した。もちろん、『一切智の夢』と本稿『南方熊楠の学問形成』とは、それぞれ独立した著作であるが、前者で詳述した論点は後者では極力省き、前者で不足している部分を後者で重点的に論じるなどの配慮をほどこした。そのため、『一切智の夢』を言えば導入部、本稿を本編と想定しても、読み得るものとして構成している。

以上のように、本稿『南方熊楠の学問世界』は、この十数年にわたる筆者の研究を総合した著作である。そのため、各章で用いた資料や議論の中には、すでに一部を発表しているものも多く含まれている。ただし、これらの既発表の論文に関しては、あくまで部分的・断片的な使い方をしており、本研究ではいったんすべての要素を再度吟味し、文脈の中に咀嚼し直した上で配置し、全十章が連関するかたちに書き改めている。

## I 教養の基盤としての東アジア博物学

- 1 幼少期に親しんだ和漢の書籍
- 2 『和漢三才図会』との出会い
- 3 『和漢三才図会』と東アジアの博物学
- 4 フォークローアとしての博物学
- 5 アメリカ・英国時代の熊楠と和漢書
- 6 東アジアの科学に向ける視線
- 7 英文論考における『和漢三才図会』の活用
- 8 『和漢三才図会』から「十二支考」へ
- 9 「十二支考」における博物学思考
- 10 東アジア博物学と近代日本

## II 西洋科学との出会い

- 1 鳥山啓の影響
- 2 自作の教科書「動物学」
- 3 「動物学」の四つの稿の比較
- 4 動物の分類法に関して
- 5 「動物学」第二稿における博物誌的記述について
- 6 和歌山中学卒業から東京遊学へ

### III 進化論と同時代の国際情勢

- 1 東京での生活
- 2 東京大学予備門での学修
- 3 進化論への傾倒
- 4 モーアの跡を追って
- 5 東アジア情勢を見る目
- 6 『佳人之奇遇』に受けた影響
- 7 予備門の退学と和歌山での静養
- 8 アメリカ行きを決断

### IV アメリカにおける一東洋人として

- 1 サンフランシスコ到着とビジネス・カレッジ入学
- 2 日本人福音会
- 3 ランシングでの農学校時代
- 4 「人種」に対する視線
- 5 「予はのち日本の民たるの意志なし」
- 6 アナーバーでの学問生活
- 7 ミシガン大学博物館とステイア
- 8 アマチュア博物学者カルキンスとの交流
- 9 ジャクソンヴィルの中国人社会とのつきあい
- 10 フロリダ南部・キューバへの旅
- 11 江聖聰との友情
- 12 その後の江聖聰

### V ハーバート・スペンサーと若き日の学問構想

- 1 アメリカ時代の進化論受容
- 2 ウォレスをめぐる議論
- 3 ハーバート・スペンサーの影響
- 4 日本におけるスペンサー受容と熊楠
- 5 トーテムズムに関する書き込み
- 6 『社会学研究』への書き込み
- 7 『社会学原理』の読解と英文論考への応用
- 8 記述社会学から「ロンドン抜書」へ
- 9 『第一原理』とその問題点
- 10 熊楠によるスペンサー批判の変遷

### VI 「東洋の星座」と英文論文の発表

- 1 ロンドンでの生活環境
- 2 一八九三年秋の二つの出会い
- 3 「東洋の星座」の執筆過程
- 4 中国・インドの星座比較
- 5 「東洋の星座」の立論の甘さとその自覚
- 6 「東洋の星座」の可能性
- 7 「東洋の星座」の反響
- 8 『マンチェスター・タイムズ』での熊楠紹介
- 9 「拇印考」とその反響
- 10 熊楠の英文執筆とアーサー・モリスン

## VII 「ロンドン拔書」の世界

- 1 大英博物館図書室での拔書開始
- 2 「ロンドン拔書」の体裁
- 3 引用文献の言語別・内容別分類
- 4 「ロンドン拔書」における人類学構想
- 5 ムーラ『カンボジア王国』の筆写
- 6 ヨーロッパと日本の文化衝突・交流
- 7 航海・旅行記集成の活用
- 8 ハクルート叢書
- 9 ユールの東西交渉史研究
- 10 時間的・空間的に拡がる旅行記の採取
- 11 「異文化接触」と旅行記
- 12 「セクソロジー」への傾倒
- 13 ヴィクトリア時代の社会と性に対する規制
- 14 「ロンドン拔書」と「ロンドン私記」

## VIII フォークロア研究における伝播と独立発生

- 1 「マンドレイク」と「さまよえるユダヤ人」
- 2 大英博物館での文献収集による増補
- 3 ヨーロッパにおける伝播説の台頭
- 4 熊楠による比較説話研究の展開
- 5 マンドレイクと商陸の類似についての結論
- 6 「さまよえるユダヤ人」に関する熊楠自身の評価の揺れ
- 7 帰国後の伝播説に関する論文
- 8 「燕石考」における共感理論

## IX 「南方マンダラ」の形成

- 1 書簡による土宜法龍との対話
- 2 シカゴにおける万国宗教会議
- 3 因果律の説明としての「事の学」
- 4 科学から真言密教へ
- 5 曼陀羅に関する法龍からの教示
- 6 華嚴経の影響
- 7 粘菌とマンダラ
- 8 因果の交錯としての宇宙
- 9 「やりあて」と異常心理
- 10 マンダラからエコロジーへ

## X 「十二支考」の誕生

- 1 帰国後の研究環境
- 2 デイキンズとの共同作業による日本文学翻訳
- 3 『ノーツ・アンド・クエリーズ』への投稿
- 4 「ロンドン抜書」調査の再開
- 5 柳田国男との協力
- 6 熊楠的文体の誕生
- 7 「十二支考」虎の回における方法論
- 8 高木敏雄宛書簡と「十二支考」への助走
- 9 「腹稿」による論理の組み立て
- 10 「十二支考」と熊楠の学問世界

## 終章——南方熊楠をどのように評価するのか

- 1 従来の学問分野と熊楠
- 2 「萃点」へと迫る思想
- 3 南方熊楠の学問形成がもたらすもの

本稿の執筆にいたる過程では、以下の研究助成を受けている。

平成一三〇一五年、科学研究費基盤研究B「南方熊楠資料の連関的研究」（研究代表 松居竜五）  
平成一六〇一九年、科学研究費基盤研究A「南方熊楠草稿の公刊と関連資料の総合的研究」（研究代表 松居竜五）

平成二〇〇二二年、科学研究費基盤研究B「南方熊楠資料の基礎研究と学際的展開」（研究代表

松居竜五)

平成二三～二五年、科学研究費基盤研究B「基礎資料に基づく南方熊楠研究の学際的・国際的展開」(研究代表 松居竜五)  
平成二六～二八年(予定)、科学研究費基盤研究B「基礎資料に基づく南方熊楠思想の総合的研究」(研究代表 松居竜五)

- 1 『南方熊楠全集』別巻一、平凡社、五五四頁
- 2 南方熊楠自身、一種のパフォーマンスとして周囲に自分の生涯を誇張して語ることは多かった。そのため、熊楠に関する伝説的な逸話の形成自体は、研究対象になり得る。飯倉照平「熊楠伝説」、『南方熊楠大事典』一二四下段～一二九頁上段、を参照。
- 3 柳田国男「南方熊楠先生——その生き方と生れつき」、飯倉照平『南方熊楠 人と思想』、平凡社、一九七四年、二三八頁
- 4 桑原武夫「南方熊楠の学風」、同書、一二頁。
- 5 益田勝実「野の遺賢」、同書、三二頁
- 6 益田勝実「こちら側の問題」、全集二巻解説、六一一頁
- 7 鶴見和子『南方熊楠 地球志向の比較学』、講談社学術文庫、一九八三年、二三九頁
- 8 ただし、変形菌(粘菌)、藻類、真菌類(キノコ)などの植物標本や図譜に関しては、一九八〇年代末に、国立科学博物館に移管されている。
- 9 中瀬喜陽・松居竜五「南方熊楠邸新発掘記」、『新潮』一九九〇年十月号
- 10 『全集』七巻一二頁
- 11 『全集』七巻一六頁
- 12 松居竜五・牧田健史・小山騰『達人たちの大英博物館』、講談社選書メチエ、一九九六年
- 13 総計四十名近くになる協力者とその分担については、『南方熊楠邸資料目録』あとがき、五二三～五二六頁を参照。
- 14 『南方熊楠・平沼大三郎往復書簡』、南方熊楠顕彰館叢書、二〇〇七年。『南方熊楠・小畔四郎往復書簡』(一)～(四)、南方熊楠顕彰館叢書、二〇〇八～二〇一一年。『キノコ四天王樫山嘉一宛南方熊楠書簡』、南方熊楠記念館、二〇一一年。